

## ソーシャルワーク実践評価における シングル・システム・デザインとその諸課題

Issues on Single-System Design in Social Work Practice Evaluation

與那嶺 司

### はじめに

2000年4月に介護保険制度が始まり、そして、2003年4月より障害者分野においても措置制度から支援費制度へ移行する。戦後50年あまりが経ち、戦後直後に形成された社会福祉制度の構造を改革しようとする試みが進められている。新しい制度のなかでは、福祉サービスの利用者は、利用者主体のサービス選択を自己責任においておこなわなければならない。また、サービスを提供する側においても、選ばれるサービスを提供する必要がある。では、どのようにこの「選ぶ」または「選ばれる」サービスを判断していくのだろうか。そこで、社会福祉分野において提供されるサービスの「効果測定」または「事後評価」が課題のひとつとなるであろう。クライアントは何をもって援助の効果があったとし、何をもって援助者はみずからの援助をうまくいっていると評価できるのか、そして、どのようにクライアントにおこる変化をクライアント自身がそして援助者が捉えることができるのであろうか。そうした状況のなか、社会福祉分野における直接援助サービスの評価手法のひとつとして、シングル・システム・デザイン (Single-System Design)<sup>1)</sup>として知られる手法が、日本でも注目されるようになってきた。

そこで、本稿において、シングル・システム・デザインと社会福祉分野においてその手法を利用する上での諸課題を整理し、また、それらの諸課題を提示する前に、米国のソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインの要

請条件としてのケースワークの効果測定に関する議論を概観する。そして、日本の社会福祉分野におけるシングル・システム・デザインの今後を考察してみたい。

### I 米国のソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインの要請条件

まず、シングル・システム・デザインがなぜ米国のソーシャルワーク分野で注目されるようになったのかを理解するために、ケースワークにおける効果測定の議論を概観してみる。そして、米国において効果測定に関連して費用対効果を重視する社会的背景について説明する。

#### 1. 米国のケースワークにおける効果測定<sup>2)</sup>

##### 1) ケースワークの効果に関する議論

ケースワークを含めたソーシャルワークとその効果を調査しようとする兆しはそれまでも見られたが、1940年代後半になってケースワークにおける効果測定の試みが本格的に始まった (Reid & Smith, 1989)。Dollard & Mowrer (1947) による「困窮・救済指数 (Distress-Relief Quotient = D. R. Q.)」が工夫創設され、この方式でケースワーカー自身の評定に高い信頼度が得られ、さらに研究を進め一層完備した測定法として、Hunt & Kogan (1952) によって、1944年から、ケースワークの効果測定手法として有名な「移動尺度 (Movement Scale)」が考案された<sup>3)</sup>。この移動尺度においては、ケースワーク処遇の開始時とその終結時の間に個々のクライ

エントの内面および環境状況に生じる変化を、ケース記録からの資料をもとに、ケースワーカーが評価する。小松(1975, p. 227)は、「(移動尺度は、)ケースワークの効果に関するリサーチへの関心をたかめるとともに、その方法論の発達に著しい影響を与え、ケースワーク・リサーチにおいて極めて重要な意義をもつにいたっているのである。」とその貢献度の高さを評価している。そして、1947年に Kogan, Hunt & Bartelme (1953) によるケースワークの効果の継続性を確認するための追跡調査が行なわれ、1940年代において評価研究が盛んになされた。

しかしながら、1960年代に入ると、ケースワークの効果に関して否定的な調査報告がなされる。その中でも注目を浴びた1965年の「職業高校の非行少女たち (Girls at Vocational High)」(Meyer, Borgatta & Jones, 1965) と「チェマング郡の多問題家族研究 (The Chemung County Study)」(Wallace, 1967) の2つの報告では、「ケースワーク処遇後のクライアントには、何らの変化も進歩もみられず、ケースワーク援助は、結局役に立たなかった。」(Meyer, et al., 1965, p. 402) と結論づけ、それまでのケースワークへの疑念と、内外からの批判や反省を引き起こすきっかけとなった(出村 1979)。1968年には、Briar (1968) が、「ケースワークの苦境」と題し、ソーシャルワーク誌においてその効果も含めてケースワークに対する激しい批判や非難を展開した。この1960年代から、ケースワークの効果に対する否定的な見解とともに、社会問題に対するマクロなアプローチとしてソーシャルアクションや社会改革の機運が高まったこともあり、ケースワークの存在意義に疑問を投げかける「ケースワークの受難期」が訪れることになる(山崎 1977: 36-37)。

1970年代に入り、ケースワークに対する内外からの批判とともに、心理療法の効果について

の問題提起にも刺激を受け、ソーシャルワーク実践の効果や責任に関する議論が激しく行なわれた。1973年には、Fischer (1973) が、「ケースワークは効果的なのか? (Is casework effective? : A review)」と題する論文を発表し、それまでのソーシャルワーク実践における効果に対して疑問を投げかけた<sup>4)</sup>。Fischer は、この論文のなかで「ケースワーク」をあいまいなたちで定義しその効果を結論づけているため、その結論に対する批判は少なくない。しかしながら、このような議論のなかで、「科学的実践 (scientific practice) モデル」(Bloom, 1975) や「臨床科学者 (clinical scientist) モデル」(Briar, 1978) と呼ばれるモデルが提案された。これらのモデルにおいては、具体的な介入技術を定め、介入の目標を観察し測定するといった科学的方法の基本的な技術を、臨床技術に不可欠な要素であると位置づけた。そこで、モデルの重要な手続きとして、そして、実践を評価する方法のひとつとして登場したのが本稿で扱うシングル・システム・デザインである。小松(1983: 22) も先の2つのモデルに代表される「視点に基づく実践者中心アプローチにもっともふさわしい評価の方法・手順として『単一システム計画法』(single system designs) が推奨され、急速に広範囲にわたって適用されるようになってきている。」とそれらのモデルとの関連において急速にシングル・システム・デザインが広まったとしている。

## 2) 3つの異なるケースワーク効果批判

ここまで、シングル・システム・デザインがソーシャルワークに導入されるまでのケースワークの効果に関する議論を見てきた。しかしながら、この議論には互いに関連はするが大きく異なる内容の3つの批判があることに注意したい。ひとつは、ケースワークのなかでも精神分析に偏った治療ケースワークに対する批判であ

り、ふたつめの批判は、それまでのケースワーク実践そのものの実証性のなきに対する批判である。そして、3つめの批判は、ケースワークという手法ではなく、治療的ケースワークが勃興する以前そして19世紀後半にソーシャルワーク実践の中心であったより社会環境に目を向けたマクロな手法を求める方向でなされたものである。

ケースワークの効果を問うこれらの議論においてとくにケースワーク関係者に大きな反響を呼んだ「職業高校の非行少女たち (Girls at Vocational High)」(Meyer et al., 1965) に関して、白沢 (1977: 294) は、「治療的ケースワークはクライアントを援助するうえで効果をもたらさないとと言えるが、環境操作などの多様な機能を含めたケースワーク全体が効果がないとは断言できない。」としている。つづけて、白沢は、「しかし、一般的に1960年代後半までのケースワークは精神分析の影響を多大に受けて、治療的機能がすべてのケースワーク機能であるかのように考えられがちであったことも事実である。」と述べている。つまり、この時期になされるケースワーク批判の対象は、精神分析に偏った治療的ケースワークであったことに疑いの余地はない。その一方で、1950年代および1960年代において、行動アプローチ、認知アプローチ、家族システムアプローチ、エコロジカルアプローチといったほかの介入モデルが登場し実践の多様化の兆しが見られ (Reid & Smith, 1989)、それまでのケースワークの治療的アプローチにとらわれず、さまざまな理論によって実践することが可能となった。そのような状況のなかで、治療的ケースワークに対する批判は強くなっていったと考えられる。Roberts & Nee (1970) は、その編著書“*Theories of Social Casework*”で、機能主義アプローチ、問題解決アプローチ、行動変容アプローチ、家族療法アプローチなど

を解説し、治療的アプローチ以外の理論的ベースを提供しているが、これも治療的アプローチに支配されていたケースワークからの変革の兆しであったといえよう。

一方で、ケースワーク実践の実証性を問題にしケースワーク批判を繰り広げた研究者もいた。Fischer (1978) は、治療的ケースワークに限らず、それまでのケースワークそのものが科学的な裏打ちがなされていないことに対して批判的であったといえよう。ケースワーク批判は、当時大勢を占めていた治療的なケースワークに対する批判に結実したが、Fischer の場合は、基本的に、ケースワーク手法のいかんよりも科学的に効果の証明された、つまり、その実証方法のひとつとして、シングル・システム・デザインによって有効性を見出した手続きを利用すべきであり、それによって効果の証明された手法を用いるべきであるとの立場に立っている。Fisherに加えて、Bloom (1976)、Thomas (1964)、Wodarski & Feldman (1973) といった研究者も、「ソーシャルワーク専門職として、理論的な伝統や権威ではなく、科学的原則や実証的データにもとづいて人間行動の治療や理論に関する決定を下すこと」を主張した (Wodarski & Bagarozzi, 1979, p. 12)。この点では、最初の精神分析的傾向の強かった治療的ケースワーク批判としての議論とは様相が少々異なっていたといえる。

そして、最後のケースワーク批判の形態は、社会的な環境を焦点としたソーシャルワーク実践の必要性を主張する文脈でなされたものである。Briar (1968) は、鋭いケースワーク批判を試みたが、それは、専門家としてのケースワーカーがその社会的地位を高めるにしたがって、対象者との間の社会的距離は拡大し、とくに、ソーシャルワークの伝統的な対象者であった少数民族や貧困階層の援助に消極的であったケー

スワークの有り様を糾弾した。1960年代は、多発する社会問題とそれを生み出す社会的背景の急激な変化にもかかわらず、旧態依然たるケースワークを主体としたソーシャルワークの対応の立ち遅れによって、矛盾が表面化し、拡大した時代であったといえるであろう(黒川 1985)。黒川(1985:74)は、この時期に「ケースワーカーは、クライアントをこの矛盾する社会にただ順応させているだけではないのか、ということや、ケースワークは、果たしてこれら社会問題の解決に役立っているのかとその効果や機能に疑いを持つ人々がつぎつぎと現れた。」としている。このような意味でも、ケースワークの治療的アプローチへの批判というよりも、クローズアップされる社会問題を解決する手段として「不適切である」との烙印を押されたケースワークというソーシャルワークの手法そのものに対する批判の意味が大きかったともいえるであろう。

### 3) 臨床心理分野における効果に関する議論

出村(1979:130)は、「(ソーシャルワークにおける)効果測定への関心は、早くにその萌芽をみたが、それを実証研究まで進めたのは、福祉の分野より、サイコセラピーの分野が早かった。すでに1950年代の初期には、心理療法がやり玉にあげられ、その効果について痛烈な批判を浴び始めていた。」としている。そこで、臨床心理分野における議論も少し説明しておきたい。

この分野において痛烈な批判を心理療法に浴びせ掛けたのが Eysenck である。世界的に見ると、心理療法の効果に関する近代的な研究は、この Eysenck (1952) の論文に始まったといわれている (Strupp & Howard, 1992)。1952年に発表したこの論評で、セラピーの量が多ければ多いほど、回復率は低くなったと結論づけた。もちろん Eysenck の研究はその計画のうえで、また方法論的にも多くの批判が寄せられたが、

当然のことながらこの論評は、その後の心理療法、カウンセリング、およびケースワークにおける評価研究の促進に貢献した(武田 1965)。しかしながら、その後、心理療法群と統制群を比較した実験研究375件を対象としたメタ分析により、Smith & Glass (1977) が、心理療法は効果があることを証明した。また、Bergin & Lambert (1978) は、Eysenck の1952年の論文で用いた24の研究を再分析し、83%のクライアントに症状の改善が見られることを指摘した。他の研究でも、心理療法は効果があること等が示され、心理療法は効果的かという疑問は解答済みとなり、1980年代からは、心理療法の効果を左右するのは何かというより細かい疑問に対する答えを追究する新しい段階を迎えた(金沢 2001)。

ちなみに、Eysenck が当時台頭してきていた行動療法を重視し、それまで主流であった精神分析に対して批判的であり、そこから心理療法に対する効果批判が生まれた。この系譜はソーシャルワークにおいても実践評価の流れを精神分析ソーシャルワークから行動ソーシャルワークへの関心の変化と重ねてみることができる。シングル・システム・デザインという評価手法に関しても、「心理学の行動変容学派が研究モデルと方法論をソーシャルワークに与え、その基盤の上でソーシャルワークにおける単一事例デザインの応用をおこなっていった。」と Zimbalist (1983, pp. 62—63) が説明しているように、主に行動心理学分野において今日まで発展してきた。

それゆえ、日本においても行動心理学分野における単一事例実験計画法に関する文献は少なくない(たとえば、山田 2000、南風原 2001、翻訳本として Barlow, D. H. & Hersen, M., 1984 [=1998、高木・佐久間])。また、この評価法に関する日本におけるソーシャルワーク関

連の文献もいくつかある（たとえば、平山ほか 2002、平山 1982、芝野 b 1986、岡田 1993）<sup>5)</sup>。米国においては、現在この評価法は、ソーシャルワーク（たとえば、Bloom, Fischer & Orme, 1999；Tripodi, 1994）、臨床心理学（たとえば、Barlow & Hersen, 1984）、特別教育（たとえば、Tawney & Gast, 1984）とさまざまな分野において実践評価の方法としてとり入れられている<sup>6)</sup>。

## 2. 米国のソーシャルワークにおけるコストと効果測定との関係性

加えて、米国における効果測定に関する議論は、常にコストとの関連で表出することを記しておかねばならない。ソーシャルワーク実践に必要な費用を負担する側が、使用された費用に見合った実践効果を求めるからである。

米国においては、日本と比して、政府プログラムにおける費用対効果が問われる度合いが高い。効果測定が盛んに議論され、また、ソーシャルワーク分野においてシングル・システム・デザインが登場する1970年代にも、連邦や州レベルにおけるソーシャルワーカーに説明責任を求めるプレッシャーはかなり高まっていた（Rosenberg & Brody, 1974；Tropp, 1974）。米国における税納付者である国民は、政府の税金の使途に非常に敏感であり、また、政治的などのように税金が利用されているかが政治運動の焦点となることが多い。1996年に見られたクリントン政権による福祉改革法の制定などは、政府による「巨大」な福祉政策が、逆に福祉に依存する人々を生み出したのではないか、換言すると、福祉を実質的に担うソーシャルワーカーによるサービスの効果がないのではないか、いやそれどころか状況を悪化させているのではないかという疑念が国民に浸透し結実した法案であった。また、タイトル XX が1975年の社会

保障法の改正によって成立した時にも、同様にプログラムの効果についての議論が盛んにおこなわれていた。このような背景をもつ米国と比較し、日本においては、どのように税金が福祉分野において使われているかについての関心は、税金を納入している国民の間には薄いことも確かであろう。

また、最近とくに話題に挙げられるのが、マネジドケア<sup>7)</sup>の広がりといった医療・福祉サービスのビジネス化であろう。これによって実践効果や説明責任に対する要求が高まり、そこでは、介入効果の測定は必須条件となってきており、その効果測定手法としてのシングル・システム・デザインの必要性にも影響を与えていると Bloom, et al. (1999) は述べている。マネジドケアにおいては、効果的なサービスを適切な量供給し無駄をなくすことが、そのシステムを管理・運営する保険会社等にとって重要であるため、当然ソーシャルワーカーが提供するサービスの効果がどうであるかが問われることになる。米国においてソーシャルワーカーがもっとも活躍している分野は精神保健分野であり、そこでケースマネジャーや心理セラピスト等として働いている。これらのソーシャルワーカーは真正面からマネジドケアの影響を受けることとなる。また、メディケアやメディケイドの管理システムをマネジドケア型に変更する州も増えてきており、その影響は大きいといえるであろう。

つまり、税金を納付する国民であれ、マネジドケアを運営・管理する保険会社等であれ、費用を提供している側がソーシャルワークの費用対効果を強く問うてくる状況が、米国のソーシャルワークの効果測定に関する議論の背景にあることがわかる。その背景は、日本の状況とは大きく違うといえる。

## II 日本の社会福祉実践評価における効果測定

前章においては、シングル・システム・デザインがソーシャルワーク分野において登場する背景としてのケースワーク効果測定の議論および費用対効果を重視する社会的状況を考察してきた。ここでは、日本の社会福祉分野と臨床心理分野、おもにケースワークにおける効果測定に関する研究に焦点をあて整理する。

### 1. 社会福祉分野および臨床心理分野における効果測定に関する研究

#### 1) ケースワークに関する効果測定

日本におけるケースワークの評価ならびに効果測定の研究は少ないが、そのなかで、戦後の社会福祉研究において最初の業績と考えられる木田による「ケースワークの効果測定」(木田 1957)がある(岡本 1982)。岡本(1982:119)は、「この研究はJ. ハント、L. コーガン、G. フレンチらのアメリカにおけるケースワークの効果測定に範を求めながら、『一つの日本的基準』を検討するところまで接近することを意図したものである。内容は(1)困窮・救済指数(D. R. Q.) (2)移動尺度及び(3)ケースワークの終了事例における効果の永続性を追跡する『追随研究』を紹介したもので、具体的なスケールやアイテムの訳出も含めて先駆的な研究といえる。」としている。

また、米国のソーシャルワーク・リサーチの一環としてケースワークの効果測定を取り上げたのが、武田(1965)による「社会事業調査とその問題点」である。それまでのケースワーク効果の測定に関する代表的な文献を、サーベイによる効果測定、事例研究による効果測定、および、実験計画にもとづく効果測定に分けてレビューし、社会事業における問題点を指摘している。この中には、評定者自身がそれほど客観的に評価を下しうるか、いったい誰の価値観に

従ってケースワークなり、その結果を考えるのか、または、はたして変化がケースワークによって生じたのかといった今日においても挙げられる問題を指摘している。

そして、ケースワーク現場の事例を素材にして大掛かりな実験的調査を行い報告されたのが、国立療養所ケースワーク共同研究班(1967)による「ケースワークの効果測定」である。それまでほとんどみられなかった日本におけるケースワーク実践を、客観的・組織的に測定する試みは評価される。しかしながら、ケースワークの効果があったかどうかということに関しては、さまざまな問題もあり結論に至っていない。

また、国立療養所ケースワーク共同研究班にも参加していた小松による論文がいくつかある(小松 1969; 1975; 1983など)。これらは主に米国のケースワークの効果測定に関する考え方、内容、尺度、手法などの専門的技術の先行業績を紹介したものとなっている。

いずれも、米国における効果測定に関する議論を紹介したり、または、それをもとに議論を展開するもので、日本におけるケースワークを含めた社会福祉実践に関する議論を繰り広げたものとはなっていない。国立療養所ケースワーク共同研究班等による実践評価報告はあるが、残念ながら、それらが日本におけるケースワークの効果に関する結論を示すにいたっていない。

#### 2) 臨床心理分野における効果測定

臨床実践という意味で、関連性のある臨床心理分野においてはどうかであったのか。米国におけるケースワークの効果測定に関する議論が、臨床心理実践から大きな影響を受けてなされたことを考え、日本の臨床心理分野における効果測定の議論も簡単にみしてみる。

金沢(2001)は、これまでの日本の臨床心理分野における効果研究や評価研究に関する文献をレビューした結果、それらの研究は乏しいと

結論づけている。また、あってもその「研究方法は、いわばセラピストの主観的観察を特定の理論的立場から解釈する（事例研究に偏った）ものであり、客観的評価による欧米の臨床心理学領域における心理療法の研究とは非常に異なったものである。」（金沢 2001：195）。しかしながら、「このような事例研究や臨床報告中心の日本の臨床心理学領域において、今日では、研究に基づいて効果を立証された心理療法を実践すること、およびそのような研究を重視することを求める声が上がっており、日本の精神医学領域においては、効果研究の成果を臨床実践に取り入れる動きが急速に広まっている。」としている（金沢 2001：195）。

下山（2000）は、これまで日本において心理療法の客観的な効果研究が乏しかったのは、大学紛争が研究の混迷をもたらしたという歴史も否めないものの、現実問題への解決援助について社会から強い期待が心理療法に寄せられず、セラピスト側もそのような社会的無関心に甘えてきたとも考えられるとしている。このことは、日本における社会福祉実践にも少なからずあてはまる見解でもあろう。

## 2. 日本の社会福祉実践における効果測定の現状

このようなケースワークにおける効果測定の研究が行われ、最近になって社会福祉における実践評価の研究も見られるようになってきた。しかしながら、なおも社会福祉実践現場においてこの効果測定が広がったとはいえないであろう。日本において社会福祉実践の評価が発展しない理由として、岡本（1982：117—118）は以下の6点を挙げている。

- 1) 社会福祉における評価の目的および意図の不明確さ
- 2) 社会福祉における普遍妥当性のある評価尺

度を確立することの困難性

- 3) 社会福祉における評価尺度の時代的相対性
- 4) 多局面をもつ人間生活の評価における各局面に対するウェイト作業の困難性
- 5) 価値観、態度、状況など非認知的な情意的領域における計量化や記号化の困難性
- 6) 生活の全体性と関連性に着目する福祉における生活の部分的な評価に対する疑問

最後の理由に関して、岡本（1982：118）は、「相互に錯綜する側面を部分に分けて、分析的に評価し、それを合体したところで全体がみえるのかという疑問が生じる。」としている。

また、日本において社会福祉実践が主に行われている福祉施設における効果測定研究が少ないことも日本において実践評価が発展しない要因のひとつではないかと考えられる。このことに関して、岡本（1982：120）は、これまでの評価・効果測定研究は、ケースワークを中心としたものであって、「特定の領域で試みられているにすぎず、手つかずの分野が極めて多い。ことに福祉施設における体系的な評価方式の開発は皆無に等しいと思われる。」としている。この状況が日本の社会福祉実践現場における効果測定を遅らせているといえるかもしれない。

そして、現実問題への解決援助について社会から強い期待が寄せられず、援助者側もそのような社会的無関心に甘えてきたという日本の臨床心理学分野における量的効果研究の乏しさに言及した下山（2000）の指摘は、同時に日本の社会福祉実践における状況にもあてはまる。日本の社会福祉実践現場においては、「まじめに一生懸命やっていたらうまくいくという神話(relying faith in well-intentioned)」(Magra & Moses, as cited in 山縣・加藤・林 1994：182) になおも概して包まれていたといえるであろう。

このような事情のもと、これまで日本の社会福祉分野における効果測定に関する議論は成熟

することがなかったといえる。しかしながら、「措置」から「契約」へと日本の社会福祉制度が大きく変遷するさなか、効果測定への関心は高まってきている。そこで、次章において、社会福祉実践評価法のひとつとして注目を浴びているシングル・システム・デザインの概要、その手法の見直しに関する議論、および、シングル・システム・デザインの抱えた諸課題を提示したい。

### III シングル・システム・デザインの概要<sup>8)</sup>

シングル・システム・デザインは、基本的に、その名が示すとおり1つのシステムを調査の対象として実施できる調査・研究方法である。しかし、同時に心理学やソーシャルワーク等の臨床実践における評価手法としても利用されている。集団間比較実験計画法が実験グループと統制グループとに分けて比較し介入の効果を見るのに対して、シングル・システム・デザインにおいては、同一個人または同一事例について援助をおこなう前後を比較することによって介入後の変化を見る。この介入前の時期をベースライン期と呼び、援助をおこなう時期を介入期と呼ぶ。図1にあるように、通常、ベースライン期を「A」、介入期を「B」で表す。

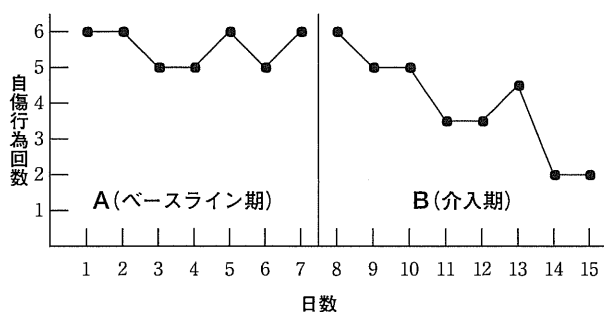


図1 シングル・システム・デザインにおけるグラフ (AB デザイン)

シングル・システム・デザインには用途によっていくつかのデザイン分類がある。もっとも基本的なデザインとして挙げられるものが、「基礎シングル・システム・デザイン (Basic Single-System Designs)」または AB デザインと呼ばれるものである (Bloom et al., 1999, pp. 374—393)。AB デザインは、2つの時期 (ベースライン期と介入期) を比較することによって、客観的な変化 (変化させようとする対象に変化が起こったかどうか) を捉えることのできるもっとも基礎的なシングル・システム・デザインの種類である。このデザインはシンプルで、ソーシャルワーク実践においても使いやすいデザインである。しかし、ほかの変数が影響した可能性を否定できないため、「介入が変化を引き起こした」とは判断できない。端的にいうと、介入と変化との原因—結果の因果関係を証明できないということである。

もうひとつのデザインは、「実験シングル・システム・デザイン (Experimental Single-System Designs)」と呼ばれるデザインである (Bloom et al., 1999, pp 394—417)。介入期やベースライン期の違いによって、ABA デザイン、ABAB デザイン、または BAB デザインとも呼ばれる。これらのデザインは、基礎シングル・システム・デザインと違い、意図的に成功した介入を一旦取り除く時期を含む。それゆえ、介入の除去に伴って変化させる対象に変化が生じれば、介入が変化をもたらしたとする因果関係の可能性を示唆することができる。しかしながら、実験シングル・システム・デザインは、どれも成功した介入の除去をおこなうデザインとして倫理的問題が指摘されている。もし、介入の除去によって利益を上回る問題が発生しそうであれば、他のデザイン (たとえば、複数ベースラインデザイン等) を使うことが必要になる。

実験シングル・システム・デザインのなかで



も、介入が変化を引き起こしたという因果関係を証明するための最低限のデザインが ABA デザイン (図 2) である。このデザインには、「もし介入が変化を引き起こしているのならば、介入を除去した後は最初のベースライン期の状況へ戻るはずである」という前提がある (Bloom et al., 1999, p. 395)。介入の除去という操作をおこなうことによって、「起こりそうもない連続的一致の法則 (the principle of unlikely successive coincidences)」により因果関係の可能性を推測することができる (Jayaratne & Levy, 1979, as cited in Bloom et al., 1999, p. 325)。しかしながら、無介入期であるベースライン期(A)で終了するため倫理的な問題が指摘される。

に介入期から始まるデザインである。危機的な状況または介入を一刻でも早く開始しなければならない場合に適切なデザインであるといえる。また、ABA デザインと違い、介入期において終了することができる。しかしながら、最初にベースライン期がないので論理的な比較の可能性

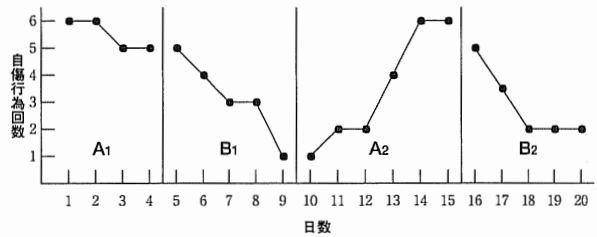


図 3 ABAB デザインのグラフ

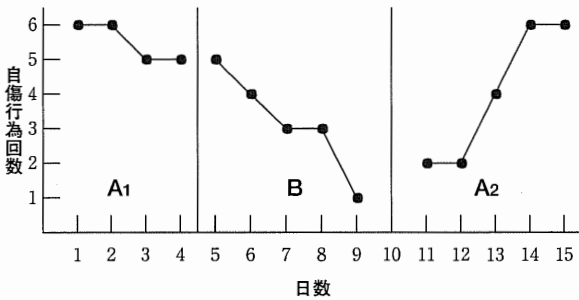


図 2 ABA デザインのグラフ

ABAB デザイン (図 3) は、ABA デザインより介入と変化の高い因果関係を推測することが可能になると考えられている。これは、時間の経過によって変化する内的妥当性を脅かす要因<sup>9)</sup>を、ABA デザインよりさらに減ずることができるためである。また、最後が介入(B)で終了するので ABA デザインより倫理的により好ましいとされる。しかしながら、AB や ABA デザインより時間がかかり実施に困難がある場合も多い。

ほかに BAB デザインがある。これは、最初

を減じることになる<sup>10)</sup>。

最後に紹介するデザインは、「複数ベースラインデザイン (Multiple Baseline Designs)」 (図 4) である (Bloom et al., 1999, pp. 418-446)。対象とされる問題、クライアント、状況のどれかひとつを変えておこなうデザインで、基本的に同じ介入手法を使用する。先の ABA や ABAB デザインのような介入の除去が選択できない場合に、代わりに使用されるデザインでもある。また、異なったクライアント等に同じ介入を使用することによって一般化 (Generalizability) の可能性が出てくる。複数の安定したベースラインが必要であったり、同じ介入方法を利用しなければならないといったことや、ひとつの対象に対する介入の効果がほかの対象にも及ぶ可能性があるなどのいくつかの問題点も指摘される。しかしながら、強固で倫理性も高いデザインであることも確かであることから、臨床でよく使用されるデザインとなっている。ちなみに、各対象に対する介入時期をずらしているのは、内的妥当性を脅かす要因、とくに「クライエン

トに変化をもたらす介入以外の出来事 (His-

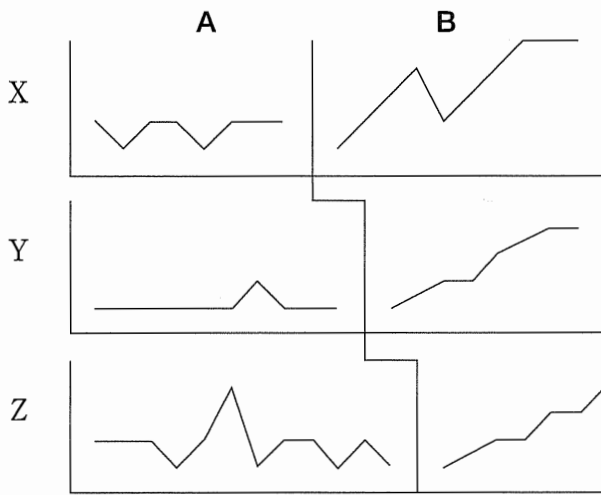


図4 複数ベースラインデザインのグラフ

tory)」を排除するためである。

ここまで、いくつかの代表的なシングル・システム・デザインを見てきたが、その他にも、交差デザイン (Crossover Designs)、継続デザイン (Constant Series Designs)、実験介入反復デザイン (Experimental Repeat of intervention designs)、複数ターゲットデザイン (Multiple Target Designs)、度合い変化デザイン (Changing Intensity Designs)、介入交換デザイン (Alternating Intervention Designs) などさまざまなデザインがある<sup>11)</sup>。

#### IV ソーシャルワーク実践評価としてのシングル・システム・デザインの見直し

ソーシャルワーク分野にシングル・システム・デザインが紹介されてからほぼ30年が過ぎようとしている。Blythe & Rogers (1993) は、この間に、「(シングル・システム・デザインがソーシャルワーク分野に登場した) 当初は、より複雑なデザインはより多くの情報を与えるゆえにより良いデザインであるという提案のもとに、

複雑であり厳密なデザインが提示されてきた……しかしながら、それらの複雑かつ厳密な手続きの必要なデザインがソーシャルワーク実践においては不向きであるということに気づき始めた。」と述べている (p. 105)。Robinson, Bronson, & Blythe (1988) も、「単一事例評価法の利用ガイドラインが、現場でテストされるにつれて変化をしてきた。たとえば、当初の議論では、独立変数の実験的統制を許すより厳格なデザインを促進することが求められた。しかし後には、クライアントの変化をモニタリングすることが実践者の主たる目的であり、クライアントの変化が介入のせいであるかどうかを確認することは2次的な目的であるということに気づくにつれて、簡易な AB デザインの重要性が認識されてきた。」とその変化を同様に述べている (p. 292)。Blythe & Rogers (1993) は、このようなソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインにおける方法上の変化を以下の3つにまとめている。

ひとつめは、より厳密で複雑なデザインがかならずしももっとも良い選択ではないということに認識するにつれて AB デザインのようなより簡易なデザインを重要視し始めたという変化である。介入と変化の因果関係を確認したいのならより高度なデザインが必要であるが、クライアントの変化や進展をチェックするだけならば、かならずしもより厳格なデザインを使う必要はないということになる。

ふたつめは、デザインの種類を介入が始まる前に選び確定することはまれであると認識するようになってきたという点である。むしろ、介入がすすむにつれてデザインを変更することのほうが普通であるということである。現実的には、当初、AB デザインであった計画が ABA になったり、ABAB であったものが逆に AB デザインにならざるをえなかったりもする。ソー

シャルワーク実践の現場は、行動心理学でのような実験的な計画性があてはまらないということに気づいたともいえる。

最後の方法上の変化は、上記の2つと関連して、クライアントの進展をチェックするという目的（介入と変化の因果関係の証明ではなく）のために、どのくらいが「許容できる」レベルの評価手続きの厳格さであるかという点である。端的にいうと、必要な手続きをどれくらい免除できるかという言い方もできよう。いうまでもなく、シングル・システム・デザインが初めてソーシャルワーク領域に導入された30年前とはちがひ、その必要とされる厳密さのレベルは低くなってきている。

このようにシングル・システム・デザインの方法上の変化を考察すると、ソーシャルワーク実践において当初紹介されたシングル・システム・デザインがいかに使用困難な手法であったかを垣間見ることができる。そして、その変化のもとで、ソーシャルワーク分野におけるその利便性が高まってきたといえるであろう。

しかしながら、ソーシャルワーカーによるシングル・システム・デザインの利用度はなおも高くないことが報告されている (Penka & Kirk, 1991; Gingerich, 1984; Richey, Blythe, & Berlin, 1987)。たとえば、Penka & Kirk (1991) の調査によると、調査に参加したソーシャルワーカーの88%が、卒業後、一度もシングル・システム・デザインを利用したことがないと回答している。これは、やや突出したデータかもしれないが、同様な状況はシングル・システム・デザインを支持する人々も含めた多くの研究者が指摘している点でもある (Kirk & Penka, 1991)。

ソーシャルワーク分野におけるシングル・システム・デザインの登場から現在までにその利便性が高まったことは確かである。しかしなが

ら、現場のソーシャルワーカーによる利用度が比較的低いことを考慮すると、なおもいくつかの問題や課題が残されているといえよう。

## V ソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインの諸課題

シングル・システム・デザインは、集団間比較実験計画法と比べて実践評価法であるということもあって、比較的ゆるやかなルールによって実施される。そのような理由もあり、指摘される問題点や課題は少なくない。ここでは米国のソーシャルワーク分野において議論された題材を中心にいくつか主なものを挙げてみることにする。

### 1. 行動変容アプローチとシングル・システム・デザイン

最初の課題は、行動変容アプローチと密接に結びついているシングル・システム・デザインを、いかに非行動変容アプローチの色合いの強いソーシャルワーク実践に効果的に応用していくかという点である<sup>12)</sup>。Fischer (1993) は、その見解を否定しつつも、「シングル・システム・デザインに対する批判として、特にソーシャルワークにおいてもっともよくあげられることは、この評価法が、関わる変数の取り扱いが容易である行動変容アプローチの実践にもっとも利用しやすく、しかし、複雑でかつ包括的な状況を対象とする伝統的な介入法を使う非行動変容アプローチの実践は、容易に評価できないのではなかろうかということである。」と述べている (p. 37)。Wakefield & Kirk (1997) は、精神分析や認知心理療法などの非行動変容アプローチの介入における治療結果を測定するにはシングル・システム・デザインは適していないと指摘している。もともと、シングル・システム・デザインが行動心理学分野において開発された手法で

あることを考えると、その行動変容アプローチへの偏向性は理解できるであろう。

一方、Marlow (1993) は、「多くのソーシャルワーカーが、シングル・システム・デザインを利用することを思いとどまるのも、そのデザインが行動変容アプローチにのみ適切であると思いついているからである。」としている (p. 168)。Marlow が主張するように、ソーシャルワーカーの「思い込み」が、シングル・システム・デザインの利用を阻んでいるとする意見も少なくない。

しかしながら、どちらにせよ、この問題にいかに取り組むのかについて、構造的な問題としてシングル・システム・デザインという手法自体を修正しなければならないのか、それとも単にソーシャルワーカーが、非行動変容アプローチによる実践に対してシングル・システム・デザインを利用し、その経験を積むことで解決できるのか、なおも結論は出ていない。

シングル・システム・デザインを利用するために、より具体的で測定可能な介入法や目標を開発および設定することは、ソーシャルワーク実践において有益であろう。しかしながら、その「測定の可能性」、または「行動変容技法」を求める過程のなかで、ソーシャルワーカーとしての専門職の機能までも犠牲にするかもしれないとの Zimbalist (1983) の指摘も念頭に置きつつ、シングル・システム・デザインのソーシャルワーク分野における方向を考えていく必要があるだろう。

## 2. 実験シングル・システム・デザインにおける倫理的問題

Wakefield & Kirk (1997) は、介入の遅延と介入の除去の問題をあげている。シングル・システム・デザインでは、ベースライン期においてデータを集めるために介入を遅らせる可能

性がある。また、ABA デザイン等に関しては、一旦有効であると思われる介入を除去するということになる。しかしながら、それらがかならずしもクライアントのためではなく、より実践者側の都合によるものであり、倫理的問題があるのではないかという指摘がなされている。

Bloom et al. (1999) は、「もし、そのクライアントやほかの人々がある程度の危害をこうむるように思えるのであれば、これは、(介入の) 除去は適切 (なデザイン) ではなく、ほかのデザインに変更されるべきであるという重要なサインであろう。」として、倫理的に問題の発生しそうな場合において介入の除去の必要なデザインを避けるようすすめている (p. 398)。しかし、どこまでが許容できる程度の危害で、どこまでがそうでないのかの認識が非常に難しい。

実際に「危害がある」かどうかということはもとより、ソーシャルワーカーたちが主観的に「危害がある」と感じるかどうかということがポイントでもある。より倫理的に問題の少ないデザインの開発と同時に、シングル・システム・デザインの倫理問題に関するより多くの実証的研究をおこない、現場のソーシャルワーカーらの「感じ方」に変化を加えていくことも必要であろう。

## 3. 質的調査 VS. 量的調査

Fischer (1993) は、「ソーシャルワークにおいて多かれ少なかれ支配的な手法は量的調査なので、質的調査を支持する人々はよく量的調査手法を時代遅れのそしてソーシャルワーク実践に無関係の調査手法であるとし…… 質的調査のほうが、ソーシャルワークの使命や『様式』により合った方法であり、かつ、より実践者に利用されているように思われる。」と述べている (p. 24)。このような質的調査と量的調査の議論は、シングル・システム・デザインという手法にお

いてもなされている。

それは、シングル・システム・デザインのソーシャルワーク実践における利用について、実践やクライアントの抱える問題は非常に複雑で、それを原因—結果というような因果関係で捉えようとするのは不可能であるとする指摘である(Witkins, 1991)。以上のように主張する研究者は、この評価法が完全なる量的調査手法でおこなわれようが、シングル・システム・デザインでおこなわれようが、その実践やクライアントの生活の複雑さを「切り取られた部分」によって捉えようと試みる点で同様であるとしている。それゆえに、質的調査手法を用いてソーシャルワーク実践の効果を評価するべきであると提言している。

#### 4. 尺度 (Measures) の利便性と妥当性

Gingerich (1984) は、尺度が不十分なためソーシャルワーク実践者がシングル・システム・デザインを利用できないと報告していることに言及している。Corcoran (1993) は、それゆえ結果的に、多くの実践者が、クライアントの問題を把握してそれに見合った尺度を利用するのではなく、クライアントの問題を利用可能な尺度に合わせるという奇妙な現象が起きていると指摘している。

この問題に対処するために、主としてソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインのためにラピッド・アセスメント・ツール (Rapid Assessment Instruments [RAIs]) が開発された。RAIs は、反復測定というシングル・システム・デザインの特徴を加味して、実施、採点、そして解釈しやすくできている。それゆえ、RAIs は全体として短く、質問数等も少ない。Corcoran & Fischer (2000) によって著された「臨床実践のための尺度 (Measures for Clinical Practice)」は、「カップル」、「家族」、「子ども」、

「大人」などの項目別に、さまざまな種類の RAIs を集めた尺度集で、シングル・システム・デザイン以外においても利用されている。また、Hudson (1992) によって開発された WALMYR Assessment Scales (WAS) も、ソーシャルワークにおけるシングル・システム・デザインでの利用を想定した RAIs のパッケージとして有名である。以上のようなさまざまな種類の尺度が利用できる一方で、しかしながら、複雑かつ個別的なクライアントの問題はなおもその範疇におさまりきらず、さらに、RAIs 自体が比較的新しい尺度であるということもあり、より多くの RAIs の開発およびそれらの妥当性や信頼性の実証が課題となっている。また、RAIs は、基本的に集団研究において妥当性や信頼性を証明された尺度であって、その尺度をそのまま個別の事例に適用できないとした指摘がある (Wakefield & Kirk, 1996)<sup>13)</sup>。ほかに、繰り返し同じ個人に対して使用されるがゆえの反応効果 (reactive effect) などが RAIs に見られる問題としてあげられる (Corcoran & Fischer, 2000)。

#### 5. クライアントとの短期間の接触しかしない介入

危機介入、シングル・セッション・セラピー (single-session therapy)<sup>14)</sup>、または、ケースマネジメントのような種類の介入においてはシングル・システム・デザインは利用しづらいという指摘がある (Corcoran, 1993)。反復測定が重要な特徴のひとつであるシングル・システム・デザインである。ゆえに、1回で終了してしまうような短期の介入の効果を測定することは難しいという主張も当然であろう。

Bloom et al. (1999) は、こうした状況を「最小限の接触しかしない状況 (Minimal-Contact Situation [MCS])」(pp. 490—494.) としてその扱い方を説明している。たとえば、再構築ま

たは遡及的ベースライン<sup>15)</sup>を使ったりするなどの方法を提言している。しかし、このような例に関する実践報告はほとんどなされておらず、また、全体としてのMCSの取り扱い方についてはなおも不明な点が多く、現場のソーシャルワーカーが応用できるためには、今後より包括的な方法論が必要とされるように思われる。

## 6. 一般化 (Generalization) およびデータ複製 (Replication of the findings)

一般化とデータ複製が難しいという理由は、あきらかにシングル・システム・デザインという手法が、介入と変化の因果関係を捉えることが難しい方法であることからくる。つまり、シングル・システム・デザインにおいては内的妥当性を揺るがす要因<sup>16)</sup>を排除することが難しいからである。

確かに、より複雑かつ高度なデザイン（たとえば、ABABAB デザインや複数ベースラインデザインなど）を使い、多数のクライアントに対してこの手法を適用してみれば、その介入と変化の因果関係が高まり、一般化やデータ複製の可能性がでてくるかもしれない。しかしながら、なおもその一般化やデータ複製という点においては集団間比較実験計画法には及ばないということが妥当であろう。だが、このシングル・システム・デザインがそもそもそのような点において考案されてきたのではなく、一般化を主目的としない実践評価のデザインとして登場してきたことを勘案すると当然のことであるともいえる。

## 7. ソーシャルワーク実践におけるコスト

Rubin & Knox (1996) は、シングル・システム・デザインは多大な労力と時間を要し、このことがソーシャルワーカーが現場でその評価法を利用することを阻んでいるのではないかと

している。そして、その費やされるコストに対してそれに見合った見返りがないのではないかということが問題として指摘される。Mutschler & Jayaratne (1993) も「多くのワーカーは、単一事例法（シングル・システム・デザイン）が、時間がかかり、また、自分たちの実践に不相应であると感じている。さらに、その（シングル・システム・デザインという）手法がより効果的な実践をもたらすという明らかな証拠はない。証拠がないとうことを考えると、（ソーシャルワーカーやサービス提供機関管理者に対するシングル・システム・デザインをとり入れる）手続き変化への動機づけは低いといわざるをえない。」と述べている (p. 125)。確かに、シングル・システム・デザインの利用は現場のソーシャルワーク実践の効果を高めるという主張 (Bloom et al., 1999) に関してはまだ実証されていない (Wakefield & Kirk, 1996)。

このような客観的な実証がなおも棚上げにされていることと同時に、現場のソーシャルワーカーおよびサービス提供機関管理者の主観的観点からもシングル・システム・デザインの有用性が、その必要な労力と時間を考える場合、Bloom らの主張するように受け取られていないようである。事実、先にも言及したように、現場のソーシャルワーカーによるシングル・システム・デザインの利用度が低いという報告も少なくない。

Corcoran (1993) は、「わたしの経験から控えめに見積もって、週にひとりのクライアントに10分余分にシングル・システム・デザインのために時間をさかれたとしても、25人のケースをもつこととして、週に半日余分に時間が必要になる。テキサス地域精神保健センターのプログラム・ディレクターの話によると、もし、臨床家にそのような時間があれば、余分に2、3人のクライアントに対応することができる。」と、

現場の時間的なやりくりの難しさを描写している (p. 150)。

このコストの大きさおよび実践者や管理者の負担感を軽減するという理由もあり、シングル・システム・デザインのためのパソコン・プログラムも開発されている<sup>17)</sup>。このようなプログラムが、ソーシャルワーク実践におけるシングル・システム・デザインの普及に貢献するであろう可能性は見られる (Conboy & Beckerman, 2000)。しかしながら、90年代当初にこれらのプログラムがすでに開発されていたことおよびその実際の普及状態を考慮すると、これらのプログラムが普及していないゆえにソーシャルワーク領域においてシングル・システム・デザインが広がりを見せないのか、逆にシングル・システム・デザインが評価法として普及しないゆえにこれらのプログラムが利用されていないのか、その点に関してはなおも明確ではない。

## 8. データパターンの曖昧さ

Rubin & Knox は、シングル・システム・デザインの視覚分析において欠かすことのできないグラフにおけるデータのパターンを、明確に把握することが困難であると指摘している (Rubin & Knox, 1996; Rubin, 1996)。このデータパターンとは、簡単にいうと、スコアや数が上昇している (図5) とか、大きな変化なく維持している (図6) といったデータの変化の仕方である。しかしながら、現実のデータの変化はそのように簡単に解釈できるケースは決して多くはない。それゆえ、このデータパターンの曖昧さに関しては、シングル・システム・デザインを強く支持する Bloom et al. (1999) も指摘しているところである (pp. 542—556.)。

また、Rubin & Knox (1996) および Rubin (1996) は、行動変容アプローチ以外の介入法においては、このデータパターンの解釈がさら

に困難になっているのではないかと指摘もしている。そこで、このデータパターンをいかに解釈できるようにするのかについて、統計処理も含めた手法による研究もおこなわれている (Nugent, 2000)。今後、データパターンの解釈をより容易にすることが、現場のソーシャルワーカーの実践におけるシングル・システム・デザインの利用を促進するための課題となってくることは確かであろう。

## VI 日本の社会福祉実践におけるシングル・システム・デザイン

日本においても、社会福祉分野におけるシングル・システム・デザインに関する文献は、すでに紹介したようにいくつかあるが、実践に応用しその結果を報告したものは少ない。たとえば、三原・豊山 (1991) による知的障害者に対する ABC デザインの適用や、身体障害児に対する AB デザインを肥満児指導に利用した三原 (1992) などがあるが、どちらも行動変容アプローチを使った介入法に対するものである。

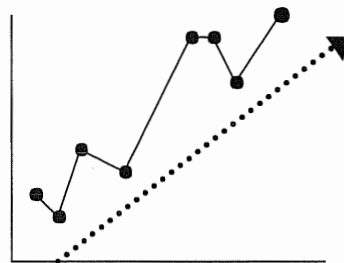


図5 「スコアの上昇」を示すグラフ

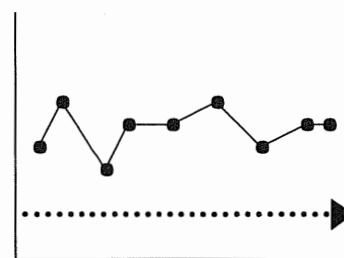


図6 「維持・無変化」を示すグラフ

これまでみてきたように、ソーシャルワーク分野におけるシングル・システム・デザインの要請背景として、米国においてはケースワークに関する効果測定に関する議論があった。また、費用対効果という観点から効果測定に関する議論が盛んになされたことがわかる。一方、日本においては、社会福祉実践における効果測定に関する議論は、米国における議論をもとになされる程度であり、日本におけるケースワーク実践をもとにした議論とはなっていない。もちろん、ケースワークに限らず社会福祉分野一般における効果測定の認識が高くない。また、費用対効果の視点が、これまでの措置制度のもとでは欠けていたところであり、社会福祉従事者にとっては米国におけるそれに比べて、それほど重要でなかったといえる。このような状況のなかで、米国と同様にシングル・システム・デザインに対する必要性が高まったとは言い難い。シングル・システム・デザインを普及させる前に、いや、普及させるためにももう一度日本の社会福祉実践における効果測定に関する議論を深める必要があるのではなかろうか。

また、米国では、社会福祉分野の研究者のなかでもシングル・システム・デザインの方法論に関してはなおもいくつかの課題が指摘されている。たとえば、シングル・システム・デザインを日本の社会福祉分野において利用するにしても、これらの諸課題を念頭に置いておかなければ、評価実践におけるプロセスを誤ったり、得られたデータを誤解釈するおそれがある。また同時に、日本の社会福祉実践現場の事情を考慮したかたちで、これらの諸課題を捉える必要があるであろう。

## おわりに

米国において、シングル・システム・デザインがソーシャルワーク分野に登場してほぼ30年

という月日が経とうとしている。米国には、シングル・システム・デザインを必要とする背景があった。しかし、それでもなお、現場のソーシャルワーカーが日常的に利用できるためにはなおも多くの課題が残っている。

日本の社会福祉実践領域においてもシングル・システム・デザインは幾人かの研究者によって実践の評価法として紹介されている。しかしながら、この評価法における教育や理解がすすんでいる米国においてもなおもいくつかの課題が残されていることを考えると、日本におけるシングル・システム・デザインの普及がなされるまでにはまだ多くの時間が必要であろう。そして、取り組まなければならない課題も少なくないように思われる。

社会福祉制度が、「措置」から「契約」へと大きく変化をする時期にさしかかっている。措置制度のなかで活発化しなかった効果測定や費用対効果に関する議論も、これまでよりは盛んになってくるであろう。そして、シングル・システム・デザインという実践評価手法もその議論の中で注目を浴びるのかもしれない。しかしながら、早急にとりかかることなく吟味しつつ試行していくことが、日本の社会福祉実践分野においてこの評価手法を定着させることになるのではなかろうか。

## 注

- 1) シングル・システム・デザイン (Single-System Design) は、集団間比較実験計画法 (Comparison Group Experimental Design) に対するソーシャルワークにおける効果測定の評価法として位置づけられている。しかしながら、日本の社会福祉分野におけるこの評価法を使った実際の報告は少ない。この評価法に対して統一した呼び名があるわけではなく、ほかに「インテンシブリサーチ (Intensive Research)」、「単一被験者研究方式 (Single Sub-



ject Research Design)」、「単一N = 1 研究 (Single N = 1 Research)」、「単一事例研究法 (Single Case Study Design)」、「時系列研究 (Time Series Research)」、「単一有機体研究 (Single Organism Research)」、「単一事例実験計画法 (Single Case Experimental Design)」などの言い方がある。細かい内容はともかくとして、基本的にこれらは類似した研究・評価手法を指す言葉である (Bloom, Fischer, & Orme, 1999)。「事例 (case)」という言葉を使った呼び名 (たとえば、単一事例実験計画法) は、この手法を開発した心理学者たちが好んで使用している (Tripodi, 1994, p. 2)。一方、「1970年代に、米国で研究者たちがソーシャルワークにこの方法論を初めて導入したとき、単一被験者研究方式 (Single-Subject Research Design) という呼び名が好まれて使われた」とされる (Tripodi, 1994, p. 2)。しかしながら、さまざまに呼ばれているこの手法を包括的に紹介した日本で初めての社会福祉関連書である平山・武田・藤井 (2002) において「シングル・システム・デザイン」という呼称が使われている。また、米国のソーシャルワーク分野においてもっとも広く使われている Bloom, et al. (1999) においても Single-System Design という呼称が使われているため、本稿においては、「シングル・システム・デザイン」という言葉を使って表現することとした。しかしながら、心理学といったソーシャルワーク以外の分野の記述においては「単一事例実験計画法」を使うこととする。

2) ケースワークの効果測定に関する調査は、大きく2つの方法に分類される (芝野 1986 a)。ひとつは、法則定立型 (nomothetic) と呼ばれるものであり、端的に述べると、一般的な法則を見出すために、大量の観察やデータにもとづいて分析しようとする調査方法である。代表的なものは、集団比較実験計画法が挙げられる。もうひとつは、それぞれの事例の観察や分析を通じて、個人の変

化の過程を捉えようとする調査方法で、個性記述型 (idiographic) と呼ばれるものであり、シングル・システム・デザインもそのひとつとして挙げられる。

- 3) D. R. Q.、移動尺度、および Kogan らによる追従研究に関しては、木田 (1957) に詳しい解説がある。
- 4) また、Fischer はこれ以降、Fischer (1976) や Fischer (1978) などを著し、ソーシャルワーク実践の効果についての多くの指摘・提案をおこなった。
- 5) 早くには、平山 (1982) がソーシャルワークにおける単一被験者方式の概要とケースワークへの応用ということを中心に日本に紹介している。ほかに、芝野 (1986 b) では、臨床領域において単一事例実験計画法における統計的分析手法の導入が消極的であること、その原因のひとつがこれまでのデータの統計的分析法が利用しづらかったことを考慮して、統計学的分析法である AR モデルを単一事例実験計画法においても利用しやすい分析手法として紹介している。また、岡田 (1993) においては、単一事例実験計画法の医療ソーシャルワーク実践への応用にあたっての諸課題を提示している。
- 6) これらの分野において単一事例実験計画法のテキストも多数出版されている。ソーシャルワーク分野におけるシングル・システム・デザインのテキストとしては、Bloom, et al. (1999) や Tripodi, T. (1994) などが有名である。ソーシャルワーク分野外の単一事例実験計画法に関するテキストは、Barlow & Hersen (1984) や Kazdin (1982) などがあ
- 7) マネジドケアの特徴は(1)医療内容への (医師以外の) 第三者の介入(2)定額制を中心とする支払い方式(3)予防・健康増進の積極的取り組みの3つがあげられる。しかしながら一義的な定義があるわけではない (広井 2000)。

- 8) ここでの概要説明は詳しくは述べないこととする。シングル・システム・デザインの詳細については、すでに紹介した米国ですでに出版されているテキストや日本で初めて出版された平山ほか(2002)のテキストにまかせることとする。
- 9) 内的妥当性をゆるがす要因とは、(1)成長発達(Maturation) (2)クライアントに変化をもたらす介入以外の出来事(History) (3)測定を繰り返すことによりクライアントが変化すること(Testing) (4)測定する方法自体が変化してクライアントに変化が生じること(Instrumentation) (5)統計的に、最初の測定で極端な値は、介入には関係なく、測定を繰り返すことによって平均に近づいていく傾向(Statistical Regression or Regression to the Mean)などがあげられる。詳細は、Bloom et al. (1999) pp. 345—346. を参照のこと。
- 10) しかしながら、これに関しては、「再構築または遡及的ベースライン(reconstructed or retrospective baseline)」を形成することによってある程度クリアできる問題でもある。それまでの記憶や記録などを使って以前のベースライン期のデータを概値として再構成する。詳しくは、Bloom et al. (1999) pp. 362—363. を参照のこと。
- 11) これらのデザインに関しては Bloom et al. (1999). を参照のこと。また本文で説明したデザインおよびほかのいくつかのデザインについては、平山ほか(2002)にも説明がある。
- 12) これに関する具体的な問題の考察については、Nelson (1981)などを参照のこと。
- 13) また、Corcoran, & Fischer (2000)においてもその点が指摘されている。しかしながら、個別ケース内での比較(ベースライン期と介入期のデータ比較等)であれば問題はないであろうとする意見もある。
- 14) 1回のセッションで治療を終了する短期心理療法のアプローチ。
- 15) 注10)を参照のこと。

- 16) 注9)を参照のこと。
- 17) Auerbach, C., Schnall, D., & Heft LaPorte, H.によるSingWinがある。このソフトウェアは、Bloom, et.al. (1999)の付録となっている。シングル・システム・デザインとコンピューター技術との関係については、Mutschler & Jayaratne (1993)が詳しい。

## 参考文献

- Barlow, D. H. & Hersen, M. (1984). *Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change* (2<sup>nd</sup> ed.). Needham Heights, MA: Allyn and Bacon. (=1993、高木俊一郎・佐久間徹監訳『一事例の実験デザイン：ケーススタディの基本と応用』二瓶社.)
- Bergin, A. E. & Lambert, M. L. (1978). The evaluation of therapeutic outcomes. In S. L. Garfield & A. E. Bergin (eds.). *Handbook of psychotherapy and behavior change: An empirical analysis* (2<sup>nd</sup> ed., pp. 139—189). New York: Wiley.
- Bloom, M. (1975). *The Paradox of helping: Introduction to the philosophy of scientific practice*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Bloom, M. (1976). Analysis of the research on educating social work students. *Journal of Education for Social Work*, 12(3). 3—10.
- Bloom, M., Ficher, J., & Orme, J. G. (1999). *Evaluating Practice*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
- Blythe, B. J. & Rogers, A. Y. (1993). Evaluating our own practice: Past, present, and future trends. *Journal of Social Services Research*, 18(1/2), 101—120.
- Briar, S. (1968). The casework predicament. *Social Work*, 5—11.
- Briar, S. (1978). Research and practice: Partners

- in social work knowledge development. In J. Hanks (ed.). *Toward human dignity: Social work in practice* (pp. 15—25). Silver Spring, MD: NASW.
- Conboy, A. & Beckerman, C. (2000). MSW student satisfaction with using single-system-design computer software to evaluate social work practice. *Research on Social Work Practice*. 10(1). 127—139.
- Corcoran, K. J. (1993). Practice evaluation: Problems and promises of single-system designs in clinical practice. *Journal of Social Service Research*. 18(1/2). 147—160.
- Corcoran, K. J. & Fischer, J. (2000). *Measures for clinical practice: A sourcebook* (3<sup>rd</sup> ed.). New York: The Free Press.
- Dollard, J. & Mowrer, O. H. (1947). A method of measuring tension in written document. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 42, 3—32.
- Eysenck, H. J. (1952). The effects of psychotherapy: An evaluation. *Journal of Counseling Psychology*, 16, 319—324.
- Fischer, J. (1973). Is casework effective?: A review. *Social Work*. 18(1). 5—20.
- Fischer, J. (1976). *Effectiveness of social work*. Springfield, IL: Chas. C Thomas.
- Fischer, J. (1978). *Effective casework practice: An eclectic approach*. New York: McGraw-Hill.
- Fischer, J. (1993). Empirically-based practice: The end of ideology? *Journal of Social Services*. 18(1/2). 19—64.
- Gingerich, W. J. (1984). Generalizing single-case evaluation from the classroom to practice setting. *Journal of Education for Social Work*. 20. 74—82.
- 南風原朝和 (2001) 「準実験と単一事例実験」南風原朝和・市川伸一・下山晴彦編『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』東京大学出版、123—152.
- 平山 尚(1982)「ケースワークの新しい効果測定法「単一被験者方式」(Single-Subject Designs)について」『社会福祉研究』31巻、19—23.
- 平山 尚・武田 丈・藤井美和 (2002)『ソーシャルワーク実践の評価方法—シングル・システム・デザインによる理論と技術』中央法規出版
- 広井良典 (2000)「医療制度—マネジドケアを中心に—」藤田伍一・塩野谷祐一編『先進諸国の社会保障7 アメリカ』東京大学出版、171—184.
- Hudson, W. W. (1992). *The WALMYR assessment scales scoring manual*. Tallahassee, FL: WALMYR Publishing Co..
- Hunt, J. McV. & Kogan, L. S. (1952). *Measuring results in social casework: A manual on judging movement*. New York: Family Service Association of America.
- 出村和子(1979)「ケースワークよ、試練を超えて—効果研究の評価作業を見直す—」『社会福祉学』20巻、127—154.
- 金沢吉展 (2001)「効果研究とプログラム評価研究」下山晴彦・丹野義彦編『講座 臨床心理学2 臨床心理学研究』東京大学出版会、181-202.
- Kazdin, A. E. (1982). *Single-case research designs: methods for clinical and applied settings*. New York: Oxford University Press.
- 木田徹郎 (1957)「ケースワークの効果測定」『社会事業の諸問題』5巻、1—23.
- Kirk, S. A. & Penka, C. E. (1991). Research utilization and MSW education: A decade of progress? In L. Videka-Sherman & W. J. Reid (Eds.). *Advances in clinical social work research* (pp. 407—422.).
- Kogan, L. S., Hunt, J. McV., & Bartelme, P. F. (1953). *A follow-up study of the results of*

- social casework*. New York: Family Service Association of America
- 国立療養所ケースワーク共同研究班(1967)『ケースワークの効果測定』国立療養所ケースワーク共同研究班
- 小松源助(1969)「ケースワーク・リサーチの現況」『医療社会事業』16巻3号、6—23.
- 小松源助(1975)「ケースワーク・リサーチ」小松源助編『ケースワーク論』有斐閣、225—250.
- 小松源助(1983)「社会福祉における「評価」の意義と課題」『社会福祉研究』33巻、19—24.
- 黒川昭登(1985)『臨床ケースワークの基礎理論』誠信書房
- Marlow, C. (1993). *Research methods*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole Publishing.
- Meyer, H. J., Borgatta, E. F., & Jones, W. C. (1965). *Girls at vocational high- An Experiment in social work intervention*. New York: Russell Sage Foundation.
- 三原博光・豊山大和(1991)「行動変容アプローチにおける精神薄弱者グループに対する余暇指導—勉強行動の形成を目標に」『ソーシャルワーク研究』17巻2号、50—57.
- 三原博光(1992)「肢体不自由児への行動変容アプローチの適用—肥満児指導を中心に」『社会福祉学』25巻1号、63—84.
- Mutschler, E. & Jayaratne, S. (1993). Integration of information technology and single-system designs: Issues and promises. *Journal of Social Service Research*. 18(1/2). p. 125.
- Nelson, J. C. (1981). Issues in single-subject research for nonbehavioralists. *Social Work Research & Abstracts*. 17(2). 31—37.
- Nugent, W. R. (2000). Single case design visual analysis procedures for use in practice evaluation. *Journal of Social Services*. 27(2), 39—75.
- 岡田進一(1993)「単一事例実験計画法の医療ソーシャルワーク実践への応用—実証主義に基づく実践アプローチ」『医療社会福祉研究』2巻1号、30—36.
- 岡本民夫(1982)「社会福祉実践の水準とその評価方法」『社会福祉研究』30巻、117—122.
- Penka, E. P. & Kirk, S. A. (1991). Practitioner involvement in clinical evaluation. *Social Work*. 36. 513—518.
- Reid, W. J. & Smith, A. D. (1989). *Research in social work*. New York: Columbia University Press.
- Richey, C. A., Blythe, B. J., & Berlin, S. B. (1987). Do social workers evaluate their practice? *Social Service Review*. 23. 14—20.
- Roberts, R. & Nee, R. (Eds.). (1970). *Theories of social casework*. University of Chicago Press.
- Rosenberg, M. L. & Brody, R. (1974). The threat or challenge of accountability. *Social Work*, 19(3). 125—129.
- Rubin, A. (1996). The inflaming and defaming of the shrewd. *Research on Social Work Practice*. 6(1). 91—100.
- Rubin, A. & Knox, K. S. (1996). Data analysis problems in single-case evaluation: Issues for research on social work practice. *Research on Social Work Practice*. 6. 40—65.
- Robinson, E. A. R., Bronson, D. E., & Blythe, B. J. (1988). An analysis of the implementation of single-case evaluation by practitioners. *Social Service Review*. 62. 295—331.
- 下山晴彦(2000)「臨床現場における心理療法の工夫と統合的視点の重要性」『精神療法』26巻、325—333.
- Smith, M. L. & Glass, G. V. (1977). Meta-analysis of psychotherapy outcome studies. *American Psychologist*, 32, 752—760.

- Strupp, H. H. & Howard, K. I. (1992). A brief history of psychotherapy research. In D. K. Freedheim (ed.), *History of psychotherapy: A century of change*. (pp. 309—334). Washington, D. C.: American Psychological Association.
- 芝野松次郎(1986 a)「ケースワークの効果測定」武田 健・荒川義子編『臨床ケースワーク』川島書店、161-188.
- 芝野松次郎(1986 b)「単一事例実験計画法における評価手続 — AR モデルの臨床への応用 —」『関西学院大学社会学部紀要』52巻、33—42.
- 白沢政和(1977)「ケースワークの効果」小松源助・山崎美貴子編『ケースワークの基礎知識』有斐閣、294.
- 武田 建(1965)「社会事業調査とその問題点」『関西学院大学社会学部紀要』12巻、67—75.
- Tawney, J. & Gast, D. (1984). *Single-subject research in special education*. Columbus, OH: Merrill.
- Thomas, E. J. (1964). Selecting knowledge from behavioral science. In National Association of Social Workers. *Building social work knowledge*. New York: Author.
- Tripodi, T. (1994). *A primer on single-subject design for clinical social workers*. Washington, D. C.: NASW Press.
- Tropp, E. (1974). Expectation, performance and accountability. *Social Work*, 19(2). 139—148.
- Wakefield, J. C. & Kirk, S. A. (1996). Unscientific thinking about scientific practice: Evaluating the scientist-practitioner model. *Social Work Research*. 20. 83—95.
- Wallace, D. (1967). The Chmung county evaluation of casework service to dependent multi-problem families. *Social Service Review*, 414. 379—389.
- Witkins, S. L. (1991). Empirical clinical practice: A critical analysis. *Social Work*. 36. 158—163.
- Wodarski, J. S. & Feldman, R. A. (1973). The research practicum: a beginning formulation of process and educational objectives. *International Social Work*, 16(4). 42—48.
- Wodarski, J. S. & Bagarozzi, A. (1979). *Behavioral Social Work*. New York: Human Sciences Press.
- 山縣文治・加藤曜子・林 浩康(1994)「社会福祉と評価 —「チャイルドウェルビーイングスケール」の検討 —」『大阪市立大学生活科学部紀要』42巻、181—193.
- 山崎道子(1977)「ケースワークに対する批判をめぐって — 有効な援助の方向を目指して —」『ソーシャルワーク研究』3巻1号、36—41.
- 山田剛史(2000)「一事例実験」下山晴彦編『臨床心理学研究の技法』福山出版、133—140.
- Zimbalist, S. E. (1983). The single-case research design in developmental perspectives: mainstream or tangent? *Journal of Education for Social Work*. 19. 62—66.